

児童一人一人に道徳的価値の大切さを感じ取らせ、
それを実現させようとする道徳教育
～展開や発問を工夫した授業づくりを通して～
愛知地区 東郷町立音貝小学校 堀田 敦嗣

研究要項

1 主題設定の理由

令和7年11月に実施された中央教育審議会教育課程部会道徳ワーキンググループでは、道徳教育に関する課題として、「教師の指導力」が挙げられた。その内容は、授業の中で児童生徒に、道徳的価値について考えさせる際、物事について多面的・多角的に捉えたり、議論を深めたりするところまで指導が至っていない、ということであった。私自身、道徳の授業で、発問の仕方やその内容、また授業の構成や展開について色々と手立てを講じて実践してみるが、満足できるような結果に未だ至っていない。

今年度、小学1年生の担任となり、児童にとって初めての道徳の授業を行っている。児童は、まだ長い文章や物語文を読んで学習することに慣れていない。また、話し合い活動についても、議論するために十分な語彙をもち合わせておらず、児童主体の話し合い活動を行わせることは難しいという実態がある。それでも、それぞれの児童は新しく始まった学校生活で友達と関わり、自分の思いを伝えたり他者の思いを聞いたりして、よりよい集団生活を送ろうとしている。また、自分のわがままを押し通すのではなく、正しく善悪を判断し、級友に感謝したり謝ったりしながら、よい交友関係を築こうと努力している。そこで、内容項目A「主として自分自身に関すること」を中心にした道徳の授業を展開し、日ごろの自身の生活を見つめさせ、他者との関わり方や、よりよい集団生活の在り方について考えさせる学習活動が重要であると考えた。

今回の取組では、指導の実践を通して、児童に「道徳的諸価値について理解する」、「自己を見つける」、「物事を多面的・多角的に考える」、という3つの学習を経験させ、「自己の生き方についての考えを深める」ことについて学習させる。そして、上学年になるに連れて重ねていく道徳科の授業が充実するために必要な道徳的判断力、心情、実践意欲と態度の基礎を育てていきたい。さらに、児童一人一人が自己の生き方についての考えを深め、道徳科で考えたり学んだりしたことを実生活で実践しようとする気持ちを高めることができるよう指導していきたい。

2 研究の構想

(1) 目指す児童像

本学級の児童は、皆新しい学校生活に意欲的に親しもうとし、約束ごとの大切さをしっかりと理解できている。その一方で、自己中心的な発想から、他者の思いを十分に考慮せずに行動したり、話したりしてしまい、関係が崩れてしまうことがある。そのような状況でも、それぞれの児童が共通してよりよい生活を目指していることを認識しているので、他者を思いやりながらも、自らの意見を明確に伝え、よりよい人間関係を築けるようになってほしい。また、日々の生活の中で起こった事象について、多面的・多角的に捉え、自らの道徳的判断に基づく行動を実践しようとする意欲を高めてほしい。

(2) 研究の仮説と手立て

ア 研究の仮説

本実践を行うにあたり、以下の仮説を立てた。

- (ア) 仮説① 授業の発問を「道徳的価値について理解する」「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」「自己の生き方についての考えを深める」に分類して課題を示すことで、道徳的価値について主体的に考えることができ、理解が深まるだろう。
- (イ) 仮説② 授業の目当てを、内容項目Aに絞って設定する。これにより、児童は道徳的価値について考えやすくなり、他者との関わりの中で多様な意見が生まれ、児童一人一人の考えが深まり、道徳的行為を实践しようとする気持ちが高まるだろう。

イ 研究の手立て

- (ア) 手立て① 道徳性を養うために、(1)道徳的諸価値について理解する、(2)自己を見つめる、(3)物事を多面的・多角的に考える学習活動を設定する。
- (イ) 手立て② 授業では、手立て①で示した(1)(2)(3)の学習を経てから、(4)自己の生き方について考えを深める、という内容の主発問をするように展開する。
- (ウ) 手立て③ 学習に興味関心をもって取り組むことができるように、挿し絵を提示したり、役割演技の活動を取り入れたり、事前アンケートをとったりして、授業の中で児童がイメージをもちやすいようにする。

ウ 抽出児童について

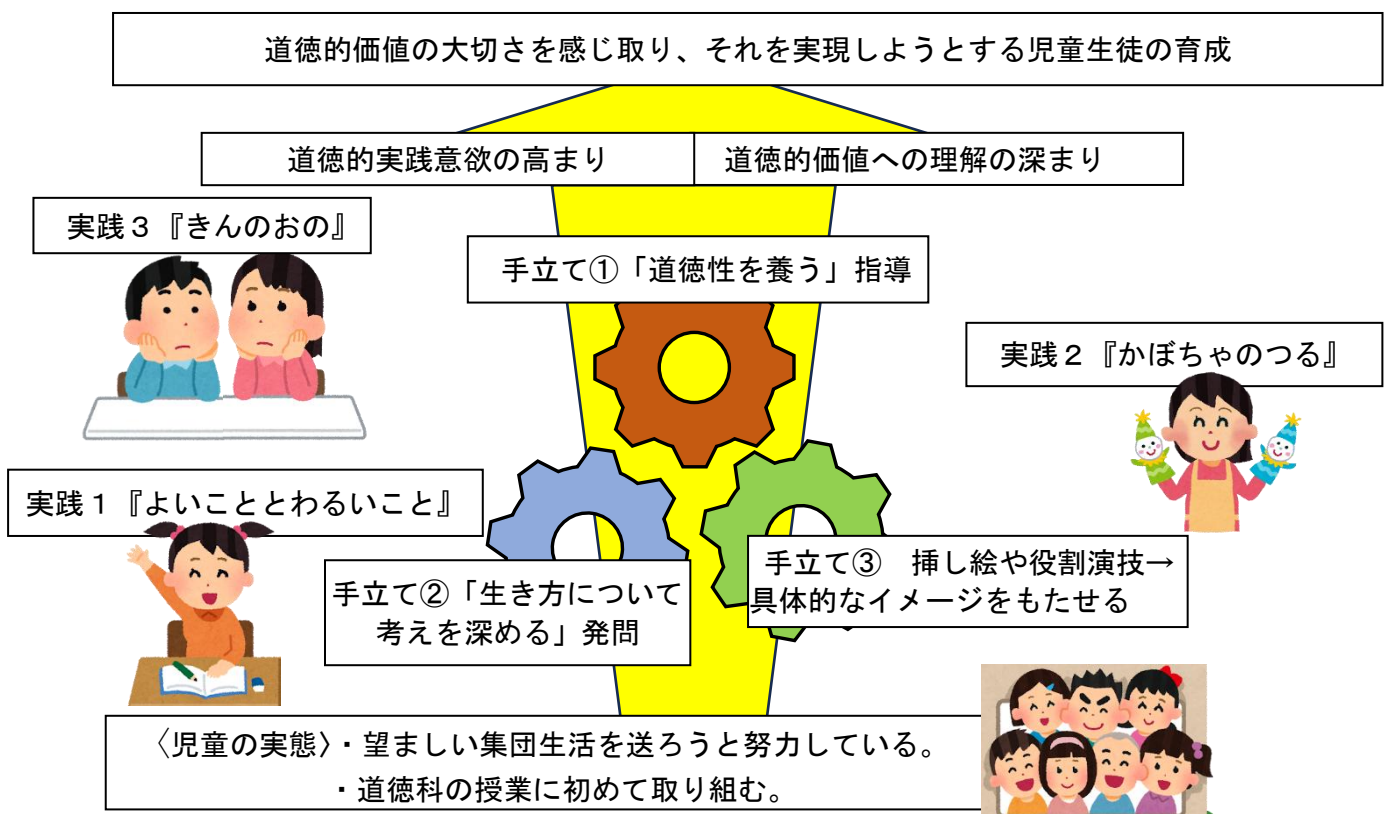
(ア) 第1学年 抽出児童A

児童Aは、日ごろの学校生活において約束ごとを理解し、自ら交友関係を築こうと働きかけることができる。その一方で、自身の考えを表現することが得意ではなく、道徳の授業ではワークシートが白紙のまま提出されることが度々ある。

(イ) 第1学年 抽出児童B

児童Bは、自己中心的な判断をしたり自身の考えを強く主張したりするため、友達との関係が悪化することが度々ある。一方で道徳の授業に対して毎回とても意欲的に取り組むことができ、困っている友達に対して率先して助けようと行動することができる。

(3) 研究構想図



3 研究の実際

(1) 実践1『よいこととわるいこと』 内容項目 A 善悪の判断、自律、自由と責任

本授業は5月下旬に実施し、教科書に示された「休み時間の絵」を見せて、児童に気づいたことについて話し合わせ、行為の善悪やその理由などについて考え発表させた。本時の目当てを「よいと思ったことをするとどんな気持ちになるのか」とし、よいことと悪いことを正しく判断して、よいと思ったことを進んで行動しようとする気持ちを高めることをねらいとした。

まず授業の導入で、本学級の本棚の写真を提示し「この写真を見てどう思うか」と尋ねた。本が整頓されないまま雑然と並べられている様子を見て、児童は「ぐちゃぐちゃ」や「汚い」と答えた。そこで、「では、この様子はよいことか、悪いことか」と尋ねると、皆一様に「悪いこと」と答えた。これを受けて、「どうしてこうなったのか」と発問し、展開の内容に入った。

次に、「道徳的価値について理解する」活動として教科書の「休み時間の絵」に注目させ、よいことには「○」を、悪いことには「△」を、児童一人一人に判断させて記入させた。多くの児童がすぐに判断して記号を記入でき、隣同士で互いにその内容を確認できた児童もいた。中には、絵の様子を間違えて捉えていた児童もいたが、その点も自分たちでコミュニケーションを交わしながら、行動の善悪の判断について共通認識をもちながら活動を進めることができた。

活動が一区切りついたところで、全体に向けて、「どうしてよいことなのか、悪いことなのか」と発問した。児童は、それぞれに考えたことを積極的に発表することができた。初めは「悪いから」「やってはいけないことだから」という内容ばかりであったが、「物事を多面的・多角的に考える」活動を課すため、「しかし、この登場人物は楽しそうだけど、本当にやってはいけないの」と尋ねると、やがて「迷惑をかけているから」「困っている人がいるから」という他者に視点を移して考えることができる児童も現れた。続けて、「自己を見つめる」発問として、「これまでに進んで行ったよいことと、その時の気持ちはどうだったか」と尋ねた。ワークシートに書いたことを隣同士で共有し、発表させると、「お手伝いをした」や「年下の子と遊んであげた」などという内容のものが見られた。その上で、「相手はどんな気持ちになるか」、「自分はどんな気持ちになったか」を尋ねると、多くの児童は、少し考えてから「うれしい気持ち」と答えた。最後に、「自己の生き方について考えを深める」活動として、「これからどんなことをしていくと、うれしい気持ちになることが増えるか」と発問した。児童からは「お手伝いをたくさんする」「もっと遊んであげる」と、これからもよいことを進んで行おうとする意見が挙がった。

授業後、数人の児童が本棚に集まっていた。様子を見ると、学級文庫を丁寧に整頓していた。また、本棚以外の場所も整頓しようとする児童の姿も見られた。このことから、児童が道徳の授業で考えたことを実践しようとする意欲が高まったことが分かった。



▲ 道徳の授業を受ける児童の様子

(2) 実践2『かぼちゃのつる』 内容項目 A 節度、節制

本授業は、6月下旬に実施した。主題は「自分のしたいことをする時に考えなければならないことについて考える」と設定し、わがままを抑えて快適な毎日を送ろうとする判断力や自律の思いを育むことをねらいとした。本時の目当てを「自分のしたいことがある時に、どんなことを考えるとよいか」とし、教材となる物語を読み聞かせた。本時で扱う『かぼちゃのつる』という

話は3つの場面で構成されており、8ページ程度と児童にとって長い文章量の物語である。そこで、児童の興味関心を持続させるために、読み聞かせを話の場面ごとに区切り、その都度、児童に思ったことや考えたことについて尋ねながら進めた。この中で「道徳的価値について理解する」「物事を多面的・多角的に考える」ことを促す発問を行った。児童は「わがままはいけない」「周りの迷惑となることはしてはいけない」という考えに至った。また、ほとんどの児童は主人公のかぼちゃの自分勝手な態度について否定的に捉えていた。

次に、児童に役割演技をさせ、かぼちゃと自身を重ねて「自己を見つめる」活動を行わせた。かぼちゃの視点でつるを伸ばしている時と、伸ばしたつるをトラックに切られてしまった時の心情について考えさせると、児童からは「つるを伸ばさなければよかった」という考えが多く出された。そこで、「つるを伸ばすことは、よくないことなのか」と発問した。すると、児童は「よくない」と答えていた。続けて、「では、かぼちゃはつるをのばして成長してはいけないのか」と尋ねると、「だめじゃないけど…」と答え、続けて「周りに迷惑をかけるのはだめ」「邪魔になることをしたのが悪い」という考えが出された。最後に「自己の生き方についての考えを深める」学習として、「自分のしたいことがある時にどのようなことを考えるとよいか」と発問した。児童からは、「まず友達に譲ればよかった」や「みんな話を聞くことが大事」との答えが出された。

ここまでの実践では、多くの児童が、善悪の判断として、自分の欲求を最優先するのではなく、他者に迷惑をかけていないかという点を意識して判断することの大切さを理解できるようになったことが分かった。翌日の朝の会で、道徳の内容に関連づけて、荷物をロッカーからはみ出さずに整頓して使用できている児童を「こういうロッカーはすっきりしていて気持ちがいいし、周りの迷惑にならないね」と褒めた。それ以降、自分のロッカーだけでなく、二人で共有しているロッカーも整頓して使用できる児童が増えた。



▲ 役割演技をする児童

(3) 実践3 『きんのおの』 内容項目 A 正直、誠実

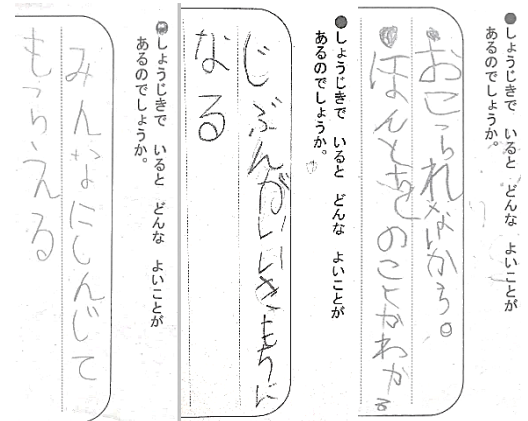
本授業では、『きんのおの』という物語文を読み、正直な木こりとうそつきの木こりの話を通して、その違いに着目させた。そこから、児童一人一人に正直であることの大切さについて考えさせ、素直に伸び伸びと生活しようとする心情を育てることを目的とした。よって、目当てを「正直でいるとどんなよいことがあるのか」と設定し、正直であろうとする気持ちを高めることをねらいとした。

授業の導入として物語の挿絵を拡大表示し、展開を予想させてから読み聞かせた。児童は皆、興味をもって話を聞いていた。続けて、「道徳的諸価値について理解する」ために、「初めの木こりは、どうして正直に答えたのだろう」と発問した。児童は「嘘をつくのはだめだから」や「正直に言わなければいけないから」と回答しており、多くの児童が「正直」の意味を理解しており、「正直であること」が当然であるように捉えていた。

次に、「物事を多面的・多角的に考える」活動として、挿絵の中の、正直な木こりと嘘をついた木こりの両方と接した神様の表情に注目させて、「神様はどんな表情をしているか」と発問した。児童は初めの木こりに対しては「にっこり」の表情、嘘をついた木こりに対しては「残念」「がっかり」の表情と答えた。続けて「どうして表情が変わったのだろう」と尋ねて考えさせた。児童

は「正直に言ったから（にっこりした）」「褒めているから（にっこりした）」や「嘘をつかれたから（がっかりした）」「金の斧をもらおうとしているから（がっかりした）」と答えた。その後、「自己を見つめる」活動のため、授業の前日に行ったアンケート結果を紹介した。アンケートでは、「これまでに嘘をついたことがあるか」、「嘘をついたときはどんな気持ちになるか」について尋ねた。本学級の26名のうち7名が「嘘をついたことがある」と回答した。「嘘をついたときはどんな気持ちになるか」の問いには、「嫌な気持ち」「悲しい気持ち」「ちょっとだけごめんねと思った」という回答が見られた。嘘をつくことで自分自身がよい気持ちにはならないことを共有してから、「自己の生き方についての考えを深める」活動として、目当ての「正直でいるとどんなよいことがあるのか」と発問した。児童からは「自分がいい気持ちになる」「みんなに信じてもらえる」という考えが出され、自分がどう思うかという視点だけでなく、他者からどのように見られるかという視点からも正直のよさについて考えることができた。

授業終末に、「正直でいることのよさを知って、これからどうしていきたいか」と尋ねると、児童からは「これからも正直でいたい」という答えが返ってきた。一問一答のような「これからも正直でいたい」という発言の中には、左記の記述内容に見られる通り、様々な「正直でいることのよさ」が含まれており、児童に自己の生き方について考えを深めさせることができた。



▲ 児童の考えが分かる記述

4 研究の成果

(1) 仮説の検証

ア 仮説①について

発問を「道徳的価値について理解する」「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」「自己の生き方についての考えを深める」の4つに分類して行ったことで、教師が指導の目当てを明確にして、授業を進めることができた。また、児童に自己の生き方について、段階を経て丁寧に考えさせることができた。児童にこれまでの経験を振り返る発問や、立場を変えて考えさせる発問を取り入れたことで、考える視点を変えたり、視野を広げて捉えたりすることができ、児童一人一人に様々な考えが生まれた。それらを交流すること、さらに多様な考えに触れることができ、道徳的価値について理解が深まったり広がったりした。

抽出児童Aは、これまでの実践を通して、自分の考えを積極的に表現する場面が増えた。実践1では、よいことには「○」を、悪いことには「△」を記入したワークシートを他者と進んで交流する姿が見られた。また、実践3では、「正直でいるとどんなよいことがあるのか」という問いに「みんなに信じてもらえる」と答えた。周りの人から見た「正直でいることのよさ」について「信じてもらえる」と表現した記述に対して、「このことに気づけたことは素晴らしいね」と、机間指導の中で声をかけた。すると、その後の全体交流の場で進んで発表することができた。表現できたことも授業内で交流したり発言できたりしたことも大きな成長であると捉える。このことから、仮説①に対して、実施した手立てが有効であったと考える。

ただ、「自己を見つめる」学習において、児童が自身の経験を振り返ることが難しい実態

が見られた。実践3の事前アンケートの「これまでに嘘をついたことがあるか」という問いに対して、学級の4分の3程度の児童が「嘘をついたことはない」と回答した。これは、児童が自身の経験を客観的に振り返ることが難しい発達段階であったためだと考える。これからは、児童の発達段階に応じて発問内容を考える必要があると実感した。

イ 仮説2について

道徳指導の内容項目の「A. 主として自分自身に関すること」について重点的に指導を進めていった。そのため、児童に発問や目当てについての的を絞って考えさせることができた。

抽出児童Bは、実践後の様子として、別の児童が授業後に本棚を整えようとした際、その手伝いを進んで行った。教師はその場で、行動を認めて褒め、「他の場所はどうかな」と尋ねた。すると、水筒のひもが垂れているロッカーや机の中まで意欲的に整頓しようと活動する様子が見られた。これは、児童Bがよりよく生きるために道徳的価値や自己の生き方について主体的に考え、実践しようと努めた表れであると考え。その他の児童も、よいことを進んで行おうとしたり、他者に声をかけるときに相手の気持ちを考えて伝え方を工夫したりするなど、道徳科の授業で学習した内容を生かして判断して行動する場面がよく見られるようになった。このことから、仮説②に対して、実施した手立てが有効であったと考える。

(2) 研究のまとめ

本研究を進める中で、児童が道徳的価値に気づき考える過程において、視野を広げて考えを深めることができた。どの道徳的価値についても、自己の視点からだけでなく、他者の視点からも物事を捉え、よさや大切さを考えることができた。様々な視点から考えることで児童の考えは多様化し、意見交流によって児童は別の視点からの考えや、一人では気づかなかった考えに触れることができた。

また、学習した道徳的価値に関連させようと教師が働きかけることで、児童が進んで学級文庫やロッカーを整頓するといった実践へとつなげることができた。学習したことを生活場面で実践し、教師がそれを認めることで、さらに道徳的価値を深めさせることができた。

5 研究の課題

今回の実践では、児童は対話的活動を交えながら意欲的に授業に取り組み、道徳的価値について考えることができた。ただ、実践しようとする意欲を高めさせることや、理想的な考えと現実的な状況の間において、よりよく生活していくための判断力については、十分に指導することができなかったと振り返る。それは、1年生の5・6月頃の発達段階において、「例えば」というように状況を想定することや、多様な価値観や考え方のもとに判断したことに対して「ゆさぶり」を起こさせる学習活動は難しかったからだ。今後、発達段階が上がって複雑な思考もできるようになっていくので、「仮定して考える」ことや、「他者との考えの違いを明確に捉える」ことをさせながら、よりよく生活していくための判断力が高まるように指導していきたい。

また、道徳的価値の実践意欲を高め、実践する場を児童の生活の中に多く設定していくことも大切である。これには学級の係活動での指導が有効であると考え。今後は、道徳科の授業を通して学び得たことを生かして係活動の工夫について考えさせる活動を行っていく。この中で児童は、他者と関わり対話を通して、皆でよりよく生きるための手立てについて、考え、伝え合うことができるだろう。また、教師は児童がとった行動について、注意深くその様子の変化を観察し、児童に判断したことに自信をもたせ、児童の実践意欲を高めていきたい。そして、児童一人一人に道徳的価値の大切さを感じ取らせ、それを実現させようとする道徳教育を今後も実践していきたい。